

きをほ畏て申けるは、まことや三位入道は、三井寺にと聞え候、さだめて夜討なんどもや向はれ候はんずらん、三位入道の一類は、渡部たう、扱は三井寺法師にてぞ候はんずらん、心にくうも候はずまかり向てえり討なども仕べき、さる馬を持て候しを、此程またしひやつめにぬすまれて候御馬一疋下し預り候は、やとぞ申ければ、大將尤さるべしとて、白あしげなる馬の、なんれうとて、ひざうせられたりけるに、よいくら置て、きをほにたぶ、給て宿所にかへり、○中なんれうに打乗のりがへ一き打ぐして、舍人男に持だてわきばさませ、やかたに火かけやきあげて、三井寺へこそはせたりけれ、○中競畏て申けるは、伊豆守殿の、木の下が代に、六はらのなんれうをこそ取て参りて候へ、参らせ候はんとて奉る、伊豆守なのめならず悦び給ひて、やがてをがみをきり、金やきをして、其夜六はらへ遣さる、夜半計に門の内へ追入たりければ、馬やに入て馬共とくひ合ければ、其時とねりおどろきあひ、なんれうが参りて候と申す、宗盛の卿いそぎ出て見給ふに、むかしはなんれう今は平の宗盛入道といふ、かなやきをこそえたりけれ、○下

〔烹雜の記 前集下〕後妻打孝女花 弱附ス

つらく戦國の俠氣を推量るに、勇を好ども理に暗く、智を貴めども好多し、目前の恥を恥として、始終の勝をおもはず、そが中にもおのづから賢不肖ありといへども、大かたはたがふ事なし、二百年前には、妻敵撃といふことありて、妻を人に竊れたる者、或は仕を辭し、或は産を破り、國々を偏歴して、奸夫淫婦を撃果すを、男子なりとおもひしとぞ、これ則目前の恥を恥として、始終の勝をおもはず、毛を吹て疵を求め、恥に恥をかさぬるもの歟、

〔武野燭談 十九〕酒井雅樂頭忠清評 井 水野周防守事

一年水野周防守忠増は、大御番承りし頃、いつの時に歟、組の何某遅参し、西の丸御門へらる、所へ参り懸り、いまだ扉は立て貫木を指ざりしに、走り入んとせられたるを、御目付某、人は輕し、法